

橋本努著『消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』

(筑摩書房、2021年刊)

Tsutomu Hashimoto, *The Ethics of Consumption Minimalism
and the Spirit of De-Capitalism*, Tokyo, 2021

渕 上 勇次郎

Yujiro Fuchigami

〔キーワード：消費ミニマリズム、資本なき資本主義〕

1 はじめに

21世紀になって、明らかに資本主義的市場経済は不調に陥ってみえる。「日本化現象」といえば、世界の主要先進国の恐れる「長期経済停滞」であるし、2008年にはアメリカ「金融資本主義」の崩壊が世界経済を震撼させた。そこへ米中の経済覇権争奪があらわになり、また「新型コロナウイルス感染症」の発生、さらにはロシアによるよもやの「ウクライナ侵攻」と続いている。しかも、地球温暖化（気候変動）とともに資源・エネルギー問題が深刻の度を加えており、もはや「資本主義経済」ばかりか人類が世界規模で不可逆的な未曾有の困難に逢着しつつある。

ここに取り上げた橋本努著『消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』は、私たちが現実の身近な生活スタイルから根本的に見直さなくてはどんな問題についても解決策は見出せないのではないか、と訴えているようだ。本書に接しながら「持続可能な社会のあり方」を考えてみたい。

本書の構成（章別項目）は以下の通り。

はじめに

第1章 消費ミニマリズムの流行とその背景

第2章 消費社会とその批判

第3章 正統と逸脱の脱消費論

第4章 ミニマリズムの類型分析

第5章 ミニマリズムの倫理

第6章 ミニマリズムと禅

第7章 資本主義の超克

あとがき

2 本書の内容（要約）

(1) はじめに

「ミニマリストたちに触発されて、人々はモノにあふれた日常を見直すようになった。このミニマリズムの現象は、しかし、いったいどんな社会的意味をもっているのだろうか」（本書、p.9、以下本書からの引用ページは必要な限りで記す）、このようなフレーズを持って本書は始まる。

「消費ミニマリズムの実践」は、「脱資本主義の精神に通じる」ものがある。それは「欲望消費によって駆動される資本主義から降りる企てに接続されるようにみえるからである」という。

(2) 第1章 消費ミニマリズムの流行とその背景

この章は導入部分であり「現象としてのミニマリズム」を検討している。4つの節があり、①「消費ミニマリズムの時代」では、話題の「こんまり」現象やミニマリストの振る舞いを紹介しながら、ミニマリズムの②「主要な背景的要因」に迫る。それはほとんどの欲求を満たしてくれるスマートフォンの普及であり、

外見では「個性を自己主張しない」「さとり世代」の登場。バブル経済の崩壊、リーマンショックを経て、2016年頃から「モノを持たない豊かさ」＝「ミニマリズム」が流行り出した。非正規雇用の増加による可処分所得が減少するなかで、ネット通販の拡大やファッション（衣服）への拘りが薄れるなどの③「背景にある社会変容」に着目。反物質主義的傾向、反消費行動は、私たちの「資本主義社会から脱する」生活スタイルとなりうるのか？と④「考察」していく。

(3) 第2章 消費社会とその批判

ここでは①「ロスト近代がやってきた」、②「ポスト近代社会は批判されてきた」、③「富を獲得することのバカバカしさ」、④「消費社会に代わる理想とは」の4つの節がある。その中で、とくに④において、資本主義社会の消費生活に批判的なさまざまな論説を取り上げて、ミニマリズムは「消費資本主義社会」に代わる「理想の社会像」を、人々の「豊かな時間」を感じる実践に求める、と問題提起。

(4) 第3章 正統と逸脱の脱消費論

この3章は①「文化から仕事へ」、②「心理学と文化人類学の視点」、③「逸脱と新たな正統」、④「複雑な問いをシンプルにする」の4つ節から成る。ここでは、一定の社会＝資本主義社会にはこの社会に正統で支配的な文化が形成されるが、過剰ともいえる資本主義の消費文化に対して、逸脱した領域にあるミニマリズムの倫理が「新たな正統文化」を創り出す可能性があると指摘する。

(5) 第4章 ミニマリズムの類型分析

ここには①「ミニマリストの台頭」、②「ミニマリストの位置」がある。アメリカ、日本におけるミニマリズムの実践例や思想性が類似の行動や考え方との関連、区別を念頭にその本質を明らかにしようと試みている。ミニマリズムの観点から、氏は放浪生活やモットアイナイ運動、「脱サラ」、「生協運動」などについて論じ、ミニマリズムは、「脱資本主義」の「生活思想・実践の一つである」と断じる。

(6) 第5章 ミニマリズムの倫理

この章は①「幸福になるための実験」、②「保守回帰」、③「脱資本主義的な自己実現」、③「自己との和

解」と続く。著者は、本章でミニマリズムは「理念よりも実践から入る点に大きな特徴」があり、「人生の新しい一步を踏み出すための倫理」であると強調する。積極的な実践を重視するところから、その倫理性と主体の精神性の「質」や「次元」といったものが問われることになる。『断捨離』は従来の整理術と異なり「人間主役の部屋づくり」として「煩悩を断つ効果」をもち、徹底すればミニマリズム倫理となる。

(7) 第6章 ミニマリズムと禅

禅との関連において①「欲望の愚かさについて」、②「禅に向けて」、③「禅の思想」と構成。本章ではミニマリズムの倫理と精神は、「すべてを捨てろ」と説く禅に通じているとして、禅に傾倒したS.ジョブズの言動に注目する。

(8) 第7章 資本主義の超克

本章には①「オルタナティブなき批判」、②「代替システム」、③「電脳技術の可能性」、④「精神の拠点」がある。著者は問う、「資本主義社会を超えて、もっとよい社会を作ることができるだろうか」と。これに対し「有望な、二つのオルタナティブがある」という。一つは「古典的マルクス主義」に基づくD.ハーヴェイの「実現可能な共産主義の社会」（かつて存在した「社会主義の計画経済」とは区別される）、もう一つはS.ラトゥーシュの「脱成長の社会」である。

(9) あとがき

著者によると、消費ミニマリズムの倫理と実践には「既存の思想と視点にはない魅力がある」として、そこに、来るべき社会に向けた「脱資本主義の精神」をみている。

3 若干の論点

(1) 「消費ミニマリズム」の極意をさぐる

「消費ミニマリズム」は、個々人の「節約術」か、あるいは一時的な「生活防衛」手段のようにみえながら、それがなぜ、大きな社会現象・潮流にまでなって「脱資本主義」の社会へ進めると考えられるのであろうか。

さて、著者の例示する「ミニマリスト」たちの「徹

底」したミニマリズム実践例をみてみると――

たとえば、「財布は持たない、服と靴は毎日同じ、食べるのは一日に一食……床で毛布にくるまって寝る」(p.27)という生活が紹介されている。財布の代わりは電子決済で済むにしても、毎日同じ服と靴で過ごすと思えば、筆者なら、どのような仕事に就いていて、どれだけの所得を得て、どんな楽しみ(娯楽や趣味)があるのかと思ってしまう。さすがに「一日に一食」となれば驚いてしまう。栄養が足りず健康を損ねるのではない、寿命も短くなるのではと心配にもなる。「一日一食」なら「一日3時間労働」(かつて、J.M.ケインズは将来のこととして、週15時間労働を想定していたが)かも知れないが、蓄えはできそうにない。また、別の実践者は「他者からもらう、不用品を回す、人の家に無料で泊まる、……売れ残りをもらう、拾う、フリマを利用する、公共サービスを使う……」(p.168)などと実践しているらしい。これにも、現代社会においてそんな世界があるのか、とにわかには信じがたいほどだ。少し冷静になってみると、なるほどそうなのかと興味深い話ではあるが、他力本願のようでもあり、参考にはなってもまともな消費者にとってはお手本にまではならない気がする。もし、全ての人が見習ったら、早々にそうした実践は行き詰まるのではなかろうか。もちろん、国民生活を基本的に飢餓と貧困から解放した資本主義社会の一隅で、サバイバルな生き方に挑戦する人が存在すること自体は、多様な価値観・人生観からして何ら不思議ではない。

しかし、橋本氏は「消費しない営みはすべて、資本主義の支配から離れたところで喜びを得るための知恵であると同時に、資本主義の社会を変えていく実践でもあるだろう」と注目。ここでいう「喜び」とは何かはあえて問わないまでも、氏は「消費しないで生きるための知恵」にミニマリズムの「思想的特徴」「脱資本主義思想」を見出している。

しかし、筆者には、たとえば、実践例にある「公共サービスを使う」というのは、「私的な(自己)消費」はしないが、「公的な消費」すなわち「公共財」(図書館、憩いの施設や公園)は利用(消費)するというわけだから、あるべき本来の消費者行動としては、どうも整合的ではないように思われる。

氏の紹介する極端とも感じる例は、物事の本質を解明する手法であるにしても、「消費しない生き方」

は、過剰消費や衝動買いへの戒めとはなりえても、いわゆる「清貧の暮らし」「節約生活」というより、文字通り受けとめれば、ほとんど「生命維持」的な「脱社会」的原始生活を想像してしまう。それはもしかすると、ミニマリストの本意ではないのかも知れない。文化的な「賢い消費」や「工夫のある生活」「断捨離生活」などとは違い過ぎて、私たち一般消費者(同時に勤労者・家族の一員でもある)は、自然災害など特殊な非常事態はともかく、そこまでは実践できないのではない。ミニマリストが家計を営んでいるとすれば、配偶者の生活スタイルとの関係性、子どもの養育費や住居費の負担などはどのようになるのか。しかも、本人は老後への備えも欠いたまま年老いていく。

一方で、近年の「所得格差」の拡大する中で、それこそ、「生きるために消費する」ことの困難な人々も多くいることにも注視しなければならない。生活困窮者への救いの手は待ったなしである。

(2)「脱資本主義」とは何か―私たちは、やはり資本主義に「寄生する」しかないのだろうか

ここで、そもそも「脱資本主義」とは何を意味するのか、確認しておこう。

氏は「脱資本主義」(decapitalism)は「ポスト資本主義」とは「異なる含意」(p.15)をもち、その「概念は、資本主義を『脱出する』、資本主義の『魔法を解く』、資本主義を『解体する』、あるいは資本主義を『降りる』といった意味になる」という。おそらく、氏は資本主義の先に資本主義とは異なる社会を想定することの難しさを感じ取っているのであろう。曖昧な表現に苦悩が滲んでいるようだ。

それにしても、「脱資本主義の精神」は、資本主義を駆動する「美德」たる「欲望をかきたてる消費」(顕示的消費)と「勤勉な労働倫理」(顕示的仕事)に対抗できるのだろうか。その精神は、いかなる経済社会に宿るのであろうか。見つからなければ、「とりあえず資本主義に寄生するしかない」のか。氏は、決して諦めない。資本主義を超えられずとも「資本主義のシステムに寄生しつつ、その論理に巻き込まれない生き方を模索する」(p.103)という。

「消費ミニマリズム」を論じる著者の姿には、私たち読者に何らか「理想的社会像」とまではいかないまでも、従来の消費文化を乗り越えた「資本主義の新しい可能性」(資本主義のバージョンアップ)がみえて

くるのではないかと期待させるものがある。

(3) 本書は、もしかすると「資本主義解体新書」かも知れない

本書はたんなる「反消費（者）運動」や陳腐な「反資本主義」を唱えているのではない。橋本氏によると「消費ミニマリズム」は、個々人の「生活改善運動」、「究極の生活スタイル」の構築にとどまらない社会的・歴史的意義を持っている。

先にみたD.ハーヴェイの「実現可能な共産主義の社会」（既存の社会主義とは異なる社会）のビジョンだが、橋本氏は、住宅のコモンズ化、ベーシック・インカム政策などに魅力を感じているようだが、行動する側の人間の力量に、疑問符を付けている。ただし、現状においては、消費ミニマリズムの生活は資本主義の社会でも「疎外なき生活が可能である」ことを示唆していると評価する。

もう一つのS.ラトゥーシュの「脱成長の社会」論は、いわゆる「持続可能な成長」という理念に関して、その「欺瞞」性を批判している、という。つまり「持続可能性」は「自然保護派」の願望であるし、「成長」は「経済開発派」に与するタームである。両派が合意したかのような理念・目標でしかないとして、「現実派」の彼自身は「脱成長」を主張しているとみる。橋本氏によると、「脱成長」社会は、「あくまでも市場経済をベースとしながら、そこに巨大な資本が支配しない仕組みを作っていく」ものである。それは「脱資本主義の精神を表している」からだ。

どうやら、橋本氏は、「資本のない資本主義」を考えている。氏は「市場経済は、もしそこに資本が支配していなければ、すぐれたシステムである」（p.313）という。端的に表現すると「資本なき市場経済」だ。「資本なき資本主義」でもあり、この資本は「無形資産」に置き換えられる。それは「ビッグ・データ」や「人工知能（AI）」である。ここに氏は「資本の支配力から解放された市場経済のシステム」（p.313）を展望する。消費ミニマリズムによって節約された社会の「資金」は巨大資本にではなく、人的資本の形成（賃金支払い・教育への投資）や社会的弱者の救済などに回せばよい、と。

こうして、著者のいう「脱資本主義の精神」が「脱資本主義社会」に結実する。かつてM.ヴェーバー流の「禁欲的なミニマリスト」が「産業革命」を通じて

「大量生産（長時間単純労働）」「大量消費（文化）」の資本主義社会を創り出したように、今度は現代の禅的な「消費ミニマリスト」たちが歴史変革的な役割を担うことになる、と想定する。

しかしながら、ここまでくると、資本主義解体の主役は、製造業主体の物的資本（工場・店舗・設備）に代わってソフト・ネットワーク分野のICT系の「無形資産」であるとされており、ミニマリストたちは残念ながら舞台の終幕に至って主役の座を降ろされているのではないかと筆者には思われる。

それは、おそらく、「消費ミニマリズム」論が消費活動の対極にある生産活動—「産業社会」の領域の解明にまだ本格的に踏み込めていないからであろう。「生産（労働）・所得のミニマリズム」に関する新たな展開が「ミニマリズム人間社会」を創り上げるのではないかと。そのとき、ミニマリズム社会はどんな「ポスト資本主義社会」なのか、果たして「脱資本主義社会」（資本なき資本主義）たり得るのか、あるいは「資本主義のバージョンアップ」なのか全貌が明らかになるであろう。

4 おわりに

以上、橋本努著『消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』をみてきた。橋本氏の提起するように、今なぜ、「消費ミニマリズム」といい「脱資本主義」なのかといえば、現代社会の地球規模の「複合的危機」状況を反映してのことであるのは多言を要しない。

問われているのは、消費ばかりではない。生産のあり方や働き方、企業経営・財政運営の仕方、そして人間社会そのもののあり方も根底から問い質されている。いわゆる産業革命から約200年、第2次世界大戦終結からさえ80年近くが経つ。地球環境問題はいうに及ばず、世界の政治経済的秩序も危ういほど軋み出している。それはなぜか。

こうした根本的な問題を考える上で、本書はきわめて有益な示唆に富む多くの論点を国内外の研究成果を踏まえ提起してくれている。

私たち読者も著者の優れた研究成果に学び、現代社会の生み出すもろもろの課題に挑戦していきたい。